

豊かな社会の貧乏論

—高田保馬と河上肇—

吉 野 浩 司

はじめに

現代社会は脱産業社会、豊かな社会、大量消費社会という華やいだ言葉で形容されることが多い。だが忘れてならないのは、その一方で、貧困層や経済格差の問題が厳然と存在していることである。これらの問題は後進国のみに限定された話ではない。そのことは、巷間にあふれるホームレスや一部の移民労働者、ならびに環境破壊や資源の枯渇などが、文字どおり世界共通の懸案課題となっていることから明らかであろう。つまり貧困と資源配分の問題は、先進国と後進国、貧者と富者の別なく、地球規模で深慮しなければならない時代に突入しているのである。本稿で「豊かな社会の貧乏論」という課題を設定したのは、こうした様々な様相をもって立ち現れつつある、現代の不平等社会の問題を見据える一視点を提供するためである。

とはいえ豊かさの中の貧困や経済格差の問題は、何も昨日今日現れた目新しい事象というわけではない。明治末から大正を経て、昭和初期に至るまでの貧困問題への取り組み、これらはある意味で、豊かな社会の貧乏論の先触れともいえるものだろう。例えば日本におけるそれらの問題への取り組みは、横山源三郎『日本之下層社会』（1899）や細井和喜蔵『女工哀史』（1925）、あるいは柳田国男『明治大正史世相編』（1931）などに結実している。

しかしながら、それら従来までの貧乏論の多くは、困窮に喘ぐ人々を何とかしなければならぬという切実な思いが、どうしても先に立ってしまいがちであった。それらは、ともすると道徳心ないしは良心に訴える現状の打開策を打ち出そうとする傾向があった。具体的には富者には浪費を控えさせ、生産者には奢侈品の製造を減らすように求める、つまりは道徳的抑制の働きかけに過ぎないものであった。容易に想像できるように、道徳的抑制は、その実行の段階

において絶望的なまでの困難をとまなう。

もちろん、旧来の解決案ばかりを、無効だといって済ませるわけにはいかない。なぜならそれらと等しく、現代社会の諸問題への取り組みも、何ほどか道徳的な抑制力に頼ろうとしているものも少なくないからである。環境保護と資源の無駄遣いをなくすこと、あるいは二酸化炭素を減らすことを謳う京都議定書の提案と、先の道徳的な訴えとの間には、思いのほか近いものがある。経済成長に支障をきたすということで、簡単に破棄できるような京都議定書を採択する環境サミットと、道徳的な提案とは、人の欲望を慎ましくしようとする、道徳心への訴えということにおいては選ぶところがない。

道徳的抑制に限界があるのは理由がある。それには、まずはその合意形成の難しさが、次にそれを実行する権力の不在ということがあげられよう。虚心に考えてみても、人間の根源に存在するであろう欲望に規制を加えることが、少なくとも現状を見る限り、ほとんど不可能に近いといわざるをえないのはいか。したがって対案として提示しうるものがあるとすれば、それは人間の欲望をそのままにしておきながら、なおかつ豊かな社会の貧困問題を解決する道であろう。このことは、現代社会の貧困問題を解き明かす上でも重要な鍵となるものである。

貧乏といえば、河上肇の『貧乏物語』（1917）が、あまりにも有名である。本書は一般に、貧乏の解決案として道徳的な抑制を提唱した、というふうに理解されている。本稿では、この『貧乏物語』を道徳的な抑制論の代表と見做し、それに代わる高田保馬の貧乏に関する諸論考を対比させることで、豊かな社会の貧乏論の1つのあり方を探ってみたい。

高田は、道徳的抑制論に代わるどのような対案を提示したのであろうか。結論をいうと、彼は力の欲望を人間存在の前提におき、そこから派生してくる人間の行動全般を読み解くための社会理論を構想した。その延長線上に彼は、人間の欲望と抵触させることのない貧乏論を展開したのである。

人間の限りない欲望に関する高田の議論の中でも注目すべきは、彼が決して人間の欲望を純経済的利害として狭く捉えていないところである。彼のいう力の欲望は、純経済的利害のみに還元できるものではない。経済的利害など度外視した欲望、例えば名誉心や賞賛への欲求も、やはり力の欲望の一側面であるとした。現代社会についていうと、NPO、その他の社会活動など、純粋な経

済的利害とは別の行動原理が備わっている活動も少なくないだろう。そうしたことを考え合わせると、人間の勢力（力の欲望）の存在を肯定するような高田の社会理論は、豊かな社会の貧乏論を構築するための重要な示唆を与えてくれるはずである。

1. 貧乏論の時代

様々な貧乏論が次々と形成されていくようになった、明治末から大正にかけての時代とは、いかなる時代であったのだろうか。特徴の1つとしてあげられるのは、日本が日露戦争（1904-05年）に辛くも勝利し列強資本主義国の仲間入りをしたという意識が浸透した時代ということである。こうした時期に横山源之助による調査報告が著されるわけだが、都会では、次第に貧民窟が人の目につくようになっていく。

また、これに続く第一次世界大戦期（1914-19年）における日本の特需景気も、この時代を象徴する出来事として重要であろう。その好景気に沸いた時代を支えていたのが、1つには『女工哀史』に描かれた、住み込みで働く女工たちであろう。そこでは「京の織り子は、つづれ破れた木綿を着て、誰が着るのか判りもしない綾絹を、せっせと織っているよ」、と彼女らの窮状が活写されている（細井、1925: 193頁）。つまり明治末から大正にかけての特長を一括りにして言うとするならば、それは資本主義の明暗2つの側面が、人々の意識に上るようになった時代ということができるのではないだろうか。巷間、にわか成金があらわれだすとともに、無産者や最下層の貧民の姿を目にする機会がふえはじめる¹⁾。それに関東大震災もあいまって、経済不況がこの階級の懸隔に拍車をかけることとなる（高田、1932: 61頁）。

日本に豊かな社会の貧乏論が現れだすのは、こうした世相を反映してのことであろう。その論の関心の向かう先は、いうまでもなく下層階級である。さらにいうと貧富の格差を生む社会の矛盾への着目である。そしてもちろん、社会主義がさかんにいわれだすのもこうした時代を背景としている。

これらの社会問題の原因の究明とその解決とを考え続けた学者の中で、高田と河上は、ひときわ異彩を放っているように思われる。ここでいう異彩というのは、つまり高田はその学究的態度において、河上はその求道的精神において、

ということである。後年、高田の学究的態度は階級の問題から民族の問題、そして世界社会論へ、というように学問的視野を拡大していくこととなった。他方、河上の求道的精神の方は、彼を貧困問題からマルクス経済学へ、そして社会主義の実現のための運動へというように、思想的な深化の道を歩ませた（古田、1965）。

河上は、いつごろから社会問題に目覚めたのだろうか。最も鮮明な形で意識に上ったのは、明治34（1901）年の足尾銅山鉍毒事件であろう。自伝において河上は、この事件のことを「マルクスがその『資本論』でこの上もなく鮮やかに描き出している」、「資本の本源的蓄積」の一現象であると述べている（河上、1985: 235頁）。

他方、高田はそれと同じ頃、どのようなことを考えていたのだろうか。明治36（1903）年、高田は佐賀県立中学校（現佐賀西高等学校）5年生時に、校友会雑誌『栄城』に文章を寄せている。彼が興味を持っていたのは、貧困者の生活である。「中学五年の早春のある夕ぐれに落日を仰いでの感激をかつてのべたことがあるが、それは弱き者の為に死のうということであった」と高田は回想している（1957: 58頁）。当時の高田は、一方では「最下層の生活を書いた初期社会思想家の論文」を読み、他方では登下校中に目にするホームレスのことを思ったという。これらのことが、若き高田に「生活水準の問題に關して強き關心を抱かせ」るように働いた（1943a: 178頁）。

京都大学文学部への進学後の明治44（1911）年、学内雑誌『藝文』に「文明の迷妄——生産政策の否定」を寄稿することとなった。これが高田の初めての学術的な貧乏論ないし生活水準論である。この論文の結論で述べられているのは、「急務は生産力の増進に存せず、貧富の懸隔を大ならしむるに存せず。たゞたゞ如何にして享樂の不平等を減少せしむべきかにあり、如何にして全民衆をして相共に樂ましむべきかにあり」（1911）というものであった。

この文章を書くのと相前後して、高田と河上は、直接に互いに顔をあわせる機会に恵まれている。それは明治44（1911）年に組織された経済学読書会によってである（1957a: 56頁～57頁）。

この傑出した二人の学者の対照的ともいえる貧乏論を読み比べるにつけ、気づかされることがある。それは、河上の求道的精神が労働者の階級問題へ、そしてマルクス研究へと収斂していったのに対して、高田の学究的態度が階級問

題に限らず、民族、国家、ひいては世界社会の問題へ、というように、次第に広がっていく広狭様々な問題関心に開かれていったということである⁽²⁾。

このように高田の貧乏論は、究極的には全人類の平等をめざして構想された、階級論や民族論との関係も深いものであった。そのことは彼の貧乏論がどのようにして形成されたのかをたどることによって明らかとなろう。それと好対照をなす河上の貧乏論は、しだいに社会主義的な色調を濃くしていく。彼らは一体どのような学問遍歴をたどって、それぞれの貧乏論を展開することになるのだろうか。

2. 高田と河上の貧乏論の軌跡

大正時代の初め、河上は世界で最も富むとされていた大英帝国を訪れる機会を持つ。ロンドンに足を踏み入れた河上が、驚きをもって眺めた光景は、街頭にたむろする最貧困層の人々の姿である。そして彼はそうした貧困層が生まれてしまう原因について深く考えるようになった。帰国後の『貧乏物語』では、ハンターの『貧困』(Hunter, *Poverty*, 1912)の統計などを参照しながら、貧富格差の問題に対しての不満を漏らしている。「英米独仏の諸国に果たして然う沢山の貧乏人が居るならば、世間で是等の諸国を指して世界の富国と称して居るのが怪しいでは無いか」と(河上, 1917: 23頁)。河上の『貧乏物語』は、何よりもまず、この豊かな社会の貧困への驚きが執筆動機となっているのである。

本書『貧乏物語』の内容は、あらまし以下のとおりである。河上は貧困の度合いを、ローンツリーの提唱する「貧乏線」⁽³⁾ではかる。その限りにおいて、彼のいう貧乏とは絶対的なものである。常識的には、そうした貧乏をなくすには社会全体の富が増加すればよいと想定されよう。しかし大英帝国の貧困層の現実を見る限り、そうとはいえない。なぜならば、いくら生産力を増強させたにしても、それが生活必需品の生産につながらないこともあり、むしろその力が奢侈品の増産の方に回されることも、十分に考えられるからである。これが河上がロンドンで目撃した豊かな社会における貧乏の実際の姿であった。

一方、高田の方は、従来の貧乏論に見られる国内の貧富格差の問題から出発しつつも、よりいっそう広い観念へと想到するようになる⁽⁴⁾。ここでいう従来

の貧乏論とは、直接的には、マルサスやマルクスらの考えを指している。マルサスは絶対的過剰人口論、マルクスは相対的過剰人口論という違いはあったが、ともに人口の過剰が貧乏を生む原因となっているという議論を行っていた。もちろん高田は、それらの人口学説に多くを学んでいる。しかし、彼の発想方法は、マルサスやマルクスの考え方とは、必ずしも一致するものとはいえない。むしろ相反する部分も数多く散見できるといえよう。それは次の一説からもあきらかである。

「マルサスやマルクスの人口理論は一面から見ると、たしかに貧乏の理論である。けれどもそれは畢竟経済的な貧乏論の範囲を出でぬ。私の仕事は此貧乏の問題を狭い経済の圍ひから解放して廣く社會の範圍にうつすといふことである」(1942a, 181頁～182頁)。次節以降で論評するように、高田の議論は、貧乏問題を経済問題という狭い枠に押し込めることなく、社会学的に取り扱うことをねらいとしていたのである⁹⁾。

大正15(1926)年6月4日、『経済往来』誌上に昭和人口論争の嚆矢となる高田の随筆、「産めよ殖えよ」が発表される。これには河上を始め、多くのマルクス主義者も論戦に参加した。この随筆のなかで、高田は次のように書いている。「有色人種の白人に對抗しうる武器はたゞ、その大なる人口増加率にあり。これを失ふ時は有色人民族自滅の時であるのを覺悟しなければならぬ」(1927: 95頁)。これが、貧困を国内の事情ばかりではなく、国外にも視野を広げた結果到達した、民族平等の観念である。

続いて昭和5, 6(1930-31)年頃、世界的恐慌とその後の国内外の混乱により、貧乏論はさらなる展開を強いられた。河上は『資本論』の翻訳および『資本論入門』の執筆に専念している。河上が本腰を入れてマルクス研究に取り組み始めた時期である。それとほぼ同じ頃、高田の「貧乏論は満洲事變以後の情勢に刺戟せられて國民皆貧論とならざるを得なかつた」。「國民皆貧論」とは、以下のような折衷主義である。「日本民族若し亡びるべからずとするならば出来るだけ其生活を切り下げる外に道はない。ことに現下の經濟的國際競争の間に於て勝ちぬく爲に然り。民は貧しく國民耐乏國家富強は民族永遠に生きる道である(昭和八年九月の執筆にかゝかる)」というものであった(1942a: 185頁)¹⁰⁾。これは高田貧乏論が被った大きな転換であるといえるだろう。

以上のような、一国内の貧富の問題から国際的な先進民族と後進民族の問題

へという研究の広がり、国内の階級の周流から国際的な民族の周流へという研究の展開の仕方と平行している。「周流の法則はいくつかの支配範囲をもつ。都市と村落はその一である。上層と下層の階級関係は其二である。而して民族の榮枯隆替はその三である」(1942a: 196 頁～197 頁)⁷⁾。

では、それらの周流は何ゆえに起きるのか。1つには従来からいわれている人口学的な理由があり、出生力と関係の深いものがあげられるだろう。だが『勢力論』では、より明示的に社会的な理由の方が強調されている。「何故に支配的民族が凋落するか、の理論的説明としては、私は別に上級の凋落の説明と異なれるものをもち込む必要はないと考へてゐる」(1942a: 205 頁; 1940: 第11章)。生活の向上(とりわけ奢侈品)を志向することにより、出生率の低下を経験する上級階級の傾向、それがそのまま支配的民族の傾向をみてもあてはまるのだというのである。

生活を低く抑えること、言い換えると奢侈品を制限することによる、虚栄の生活を改めること。あらゆるものが貨幣価値によって計られる価値意識の滲透を抑えること。そのことで何を目指そうとしたのか。それは人と人の繋がり、連携、といったネットワーク社会の形成であった。

確かに幾多の論争を繰り広げたこともあって、高田と河上の間には、意見の対立が多かったことは事実である。剰余価値論にはじまり、資本蓄積論、人口論、そして地代論にいたる河上との論争によって、高田は独自のマルクス研究を練り上げていった、という側面を持っているといってもいいだろう。しかし、そうした二人の基本的立場の相違にもかかわらず、河上の『貧乏物語』と高田の貧乏論は、筆の運びと結論において、不思議なくらいに重なり合う部分が散見されるのもまた、半面の事実であろう。その重なり合う部分にあるのは、恐らく無産者に対する同情、平等社会への希望であろう。以下では、そうした複雑な二人の学問と思想の関連を、著作内在的に読み込んでいくことにしたい。

3. 貧乏と奢侈品

貧乏をどう捉えるのかについては、大きく分けて2つの考え方がある。1つは生活を営むことが困難であるという意味での窮乏を指す、絶対的貧乏観である。そしてもう1つは、人が貧富の格差を見せ付けられることによって意識に

上る貧しさの感覚、すなわち相対的貧乏観である。河上の『貧乏物語』は、前者すなわち貧乏に対して絶対的な基準を設けて、それに解答を与えようとするものである。すでに論じたように、河上はローンツリーの「貧乏線」という概念を用いて貧乏を説明しようとする。

「食費の外、更に被服費、住居費、燃料費及び其他の雑貨を算出してそれを以て一人前の生活費必要費の再下限となし、之を根拠として貧乏線といふ一の線を描く」(河上, 1917: 15 頁)。これがいわゆる貧乏線の根本的な考え方である。絶対的な貧乏とは、このように衣食住にも事を欠き生物学的最低生活が営めないという生活というふうに一応は定めることはできるだろう。

それに対して高田は、一見絶対的に見える、そうした衣食住とでも、その内容や水準は社会ごと、時代ごとに変化が観察できるとし、そうした絶対的な見方には異を唱える。「所謂貧乏線と云ふものが認められて居ることを否定することは出来ぬ。しかしながら其線を合理的に若くは絶対的に定めることは出来ぬ。それは各の社会各の時代に於て複雑な事情から別々に決定されて居るのであらうといはざるを得ない」(1942a: 281 頁～282 頁)。彼のいうように、絶対的貧乏論者の使う「生活費」、「必要費」といった言葉ひとつとってみても、その内容は決して一定不変のものではないのである。

例えば米を常食とするようになってからの食生活は、まさにそれが基準となってしまう、それ以前に常食とされていたはずの穀類が、いささか粗末なもののように感じられてしまう。このことから分かるとおり、社会ごとに、あるいは時代ごとに、様々な貧乏の基準(貧乏線)が生じうるのである。「生活の程度が絶えず変化」しているのであるから、それにつれて基準にも変化が生じてしまうのは当然の話であろう。つまり「貧乏はあくまでも主観的色彩をもつものである」(1950: 3 頁)。

では貧乏の観念が、主観的であるというのは、どのような意味においてであろうか。高田は貧困を、「世間並みのものとして恥ずかしくない、と思ふ生活の水準」、「心落ちつく生活水準」というふう理解する。そしてこの水準に引かれるのが、貧乏線であると高田はいう。「此貧困線の特徴は絶対的客観的のものではなくして、それよりも高位にあり、社会の状況によつて伸縮乃至移動するところの相対的なものである」(1950: 4 頁)。この「世間並み」の水準ということから考えて、貧乏線とは主観的なものであると高田は断言したので

ある。

「労働者階級には傳統的乃至歴史的なる生活水準がある。これは世間並みの生活といふ生活の正常の高さよりも低い。世間並みの生活に及ばぬといふ意味に於て世俗は常に労働者生活を貧乏であるといふ。けれども資本主義の進行に伴つて蓄積乃至増加せられゆく困窮は歴史的生活水準からの沈下である。従つてそれは決して貧困がもたらす心理的苦痛とは解しがたい」(1950: 7 頁)。

心理的苦痛が貧困によつてもたらされるものではないとするなら、それは一体何によつてであらうか。一言でいうとそれは、貧富の格差意識である。具体的にいうなら、それは奢侈品を購えるものとそうでないものとの格差が露見することによつて感じられる苦痛に他ならない。

もしそうであるとするならば、次に問題となるのは、奢侈品発生 of の仕組みであらう。高田も河上也、奢侈品の発生について考察しているが、特に河上はこれを生産の面から捉えようとしている。「世間社会問題を論ずる者、往々にして浅近の所に着眼し、貧乏の根治するの策は、一に貧民の所得を増加するに在るが如く思惟す。さりながらいかに彼等の所得を増加したりとて、他方に於いて富者の富が更に一層の速度を以て増加する以上、貧富の懸隔は益々甚しきを加へ、従うて天下の生産力が奢侈贅沢品の産出に吸収さるゝの弊は、敢て之が為に匡正さるゝこと無く、其結果縦ひ貧乏人の貨幣所得は多少増加することはありとも、生活必要品の価格は更に其れ以上の速度を以て騰貴し、之が為に彼等の生活は却て苦しくなるばかりであらう」(河上, 1917: 64 頁)。

要する河上はここで、生活必要品の生産に向かわないぐらいに、奢侈品の生産が行われている事実を確認し、これこそが奢侈品発生 of のメカニズムであるとしているのである。「何故貧乏人が多いかと云へば生活必要品の生産が足らぬのだと云ひ、何故生活必要品の生産が足らぬかと云へば貧乏人が多いからだ」と云つて居る」のだが、これは「私〔河上〕の議論が循環して居るのではなくて、実際の事実が循環して居るのである」。この循環運動によつて、奢侈品の生産 of の仕組みが説明されることとなつた。「今日生活 of の必要品が充分に生産されて来ぬのは、天下の生産力が奢侈贅沢品の産出 of の為に奪ひ去られつゝあるが為である。多数貧民の需要に供すべき生活 of の必要品は、少し余分に造ると、直に相場が下がつて儲けが減るから、事業家は態と其生産力を抑へて居るのである」(河上, 1917: 64 頁)。

これに対し高田は、より人間意識にそくした説明を試みる。なぜ奢侈品が生まれてくるのかを探るには、人間の持つ「勢力」の機能に目を向けるとよいとする。ここでいう勢力というのは、高田の根本概念の1つであり、人間行動の原動力となるエネルギーのことを意味している。それが一体どういったものであるのかを、もう少し詳しく見ておこう。

高田は勢力の機能として、2つを挙げている。「一は勢力の獲得又は所有であり、二はその得たところの勢力の誇示である」。奢侈品の発生の秘密を考えるうえで重要なのは、2つめの機能の方である。つまり「勢力の誇示」のために、あるものは「費用を要求する事多きものを着け、又は使用して、之を自己の地位の目印とする」。そしてさらに勢力誇示の機能には、次なる段階が想定されている。すなわち「勢力の誇示」は、階級的に上の者の振る舞いを、すぐ下の者が真似ようとする傾向を持っていると高田はいう。「模倣は高きより低きに向つて下落する」。「上層の目印となる生活内容」が「民衆すべてに擴がると、高き地位の人にとっては、最早その地位に目印ではなくなつてしまふ。そこで上層の側に於て他の新なる生活内容がはじめられる」。こうして「自己の勢力を示すのに役立つ」、「新たな生活内容」が、次々と生まれては消えてゆくことになる(1942a: 290頁～291頁)。

だが、この2つ目の機能である「勢力の誇示」について、高田はこれを勢力の「副作用」であるとして、いささか否定的に見積もっている。なぜなら「勢力の誇示」には、合理性によっては説明しえないものが含まれているからである。むしろそれは、情意的なものであると高田はいう。人間性には「理知」の側面と「情意」の側面がある。「此生活の二つの分野の一方に於て専ら實質や合理性によつて動くのであるが、他の部分は主として情意によつて動くから便宜利益に支配せらるるとはいひがたい」(1942a: 292頁～293頁)。人間の生活をできるだけ理知的、合理的に設計しようとするならば、できうるかぎり後者の情意的、感情的な部分は抑えなければならない。仮に勢力の誇示にばかり専心してしまい、生産力の増強や合理化ということに力を注がなかったとすれば、その社会は、情緒によって行動する人間の社会となろう。

こうした情意の要素が濃厚に現れた前近代的な社会、すなわちゲマインシャフトについて高田は、確かに一面では共感を覚えてはいる。しかし人間社会の進歩と合理化のことに思いをいたすならば、できうる限りそうした要素は避け

なければならないと考えていた。したがって、高田にとって重要なのは、あくまでも勢力の第一義である「勢力の獲得又は所有」の方であった。この第一の機能を発動させることが、人をして合理的な経済活動を営ましめるための条件だからである。さらにいうと、それこそが、いたずらに勢力を顕示的消費へと向かわせないための方策であるとしたのである⁸⁾。

実際の社会生活は、勢力の2つの機能、言い換えると人間の合理的側面（理知）と非合理的側面（感情）が組み合わせられてできていることはいうまでもない。それが時に「万人の万人に対する闘争」、すなわち過剰な競争社会の観を呈することもあるだろう。もちろん河上も合理と非合理、利己主義と利他主義の絡まりあう社会生活の複雑さについて知らないわけではない。そればかりか利己主義が強まっていかざるをえない現実を直視させている。そのことについて河上は、次のようにいっている。「思ふに社会組織そのものが已に利己心是認の原則を採り、誰でもうっかり他人の利益を図つて居ると、『自分自身又は自分の子孫が明日にも餓死せぬとも限らぬ』といふ事情の下に置かれ居る以上、利他奉公の精神の大に発揚せらるゝに至らざるも亦已むを得ることである」と（河上、1917: 94頁）。

そしてこうした利己主義と利己主義とが対峙する社会的現実を分析するにあたっては、高田と同じように河上も、生きた人間という視点を持ち込むことにより、事態の收拾に取り組むことが可能となると考えていた。「社会一切の問題は皆人の問題である」とする認識が、それを象徴する言葉であろう（河上、1917: 95頁）。社会は、まずもって人間の意識の改造によって改善することができる、というのが河上の確信であった。「社会組織の改造よりも人心の改造が一層根本的である〔・・・〕其心掛とは、口で言えば極めて簡単なことで、即ち先づ之を消費者に就いて言へば、各個人が無用の贅沢を已めると云ふ事只其れだけの事である。私が先に、富者の奢侈廃止を以て貧乏根治の第一策としたのは、之が為である」（河上、1917: 95頁～96頁）。

このように河上は、人間の道徳心への訴えによって、人間を善導することができる、と信じていたのである。

4. 貧困問題への処方箋

すでに見たように高田と河上は、貧乏研究には感情を持った人間的視点を持ち込むことが重要である、という認識において同一の意見を持っていた。それは貧困問題の解決策としては奢侈品をなくさなければならない、という難問に二人が突き当たった際にもたらされた視点であった。しかしながら、そうした奢侈品をいかにしてなくすかという、具体的な方法を論じるところで、二人の意見は分かれることとなる。それはどのようにであろうか。

河上の処方箋から見ておこう。生産力の増強が、必需品の生産に結びつかず、奢侈品の生産に回されているという現実、まずこの現実を直視することから始めなければならない。「道具の発明に依つて禽獣の域を脱し得た人間が、機械の発明された今日、猶貧苦困窮より脱し能はぬと云うは、一応は不思議な事である」。そうであるとすれば、「今日社会の多数の人々が、十分に生活の必需品を得ることが出来なくて困つて居るのは、沢山に品物は出来て居るが只其分配の仕方が悪いが為では無くて、実は初めから生活の必需品は充分に生産されて居らぬのである」(河上, 1917: 58 頁～59 頁)。必需品の生産が十分になされていないにもかかわらず、奢侈品の生産ばかりが追求されていることに、河上は貧乏問題の淵源を突き止めたのであった。

貧乏の原因は奢侈品の生産にあると認めうるとすれば、それを生産者が製造しないように、また消費者が購買しないようにすればよいだろう。しかしそうするには、一体どのような手段が講じられなければならないのだろうか。河上はそれを道徳的抑制、とりわけ金持ちのそれに求めた。「実は世の富豪に訴へて、幾分なりとも其自制を乞はんと欲せしことが、著者の最初からの目的の一である。貧乏物語は貧乏人に読んで貰ふよりも、実は金持ちに読んで貰ひたいのである」(河上, 1917: 99 頁)。このように河上は、とりわけ富者の利己心を抑え、その代わりに利他心を芽生えさせようということを、『貧乏物語』の執筆当初より目論んでいたのである。

これは確かに、良心に溢れた学者の考え付きそうな、いたって常識的な見解であろう。しかし常識的ではあるが、その実行となると、とたんに困難が露呈してしまうものでもある。すでに述べたように、河上による、人の道德心に訴えかける社会政策は、昔も今も困難な事業であることにかわりない。人の勢力、

とりわけその誇示というものが、いついかなるときも強力に働いていることの証左であろう。

欲望を抑制することが困難なのは、何も「成金」に対してのみいえることではない。例えば中間階級の人間が、それまで当然のごとく消費していた贅沢品を、購わないですむ気持ちにはなかなかならないであろう。なにより奢侈品には、必需品では得られない甘美な魅力があるのである。

まずあげられるのは、顕示的消費という他者への優越感に根ざす消費行動である。だがそればかりではない。贅沢品の購入と消費それ自体のなかに、そのまま欲望の充足につながる何ものかが含まれているのである。滋養のための食材、あるいは雨風をしのぐ居住といった、目的をもった必需品の消費とは一味ちがう魅力が、贅沢品には厳然と備わっているとしかいいようがない。さらにいうと、目的のない品物であるがゆえに、その魅力は倍增するとさえいえるのではないだろうか。そうした魅力の尽きない消費というものをやめよという道徳的教説は、どうしても反感をもって迎えられることはいうまでもない。

河上もそのことを知らないではない。それを見越して河上は、現に社会主義なり国家主義なりの国家の統制によって、贅沢品の生産を抑えようとする政策を提案したりもしている。「さういふ大切な品物〔生活必要品〕がまだ十分に出来ておらぬのに、都会に出て見ると、至る所の店頭に様々の贅沢物や奢侈品が陳べられてある乎と云へば、実は其処に今日の経済組織の根本的欠点がある」（河上、1917: 59 頁）。「今日の如く各種の生産事業を私人の金儲仕事に一任し置くことなく、例へば軍備又は教育の如く、国家自ら之を担当するに至るならば、現時の経済組織は之が為著しく改造せらるゝ訳であるが、これも亦貧乏存在の一条件を無くする所以であつて、貧乏退治の一策として自ら人の考へ至る所である」（河上、1917: 66 頁）。

この解決策は、両大戦間に言論界ににぎわせた統制経済論とも響きあう主張である。しかしながら、国家主導の統制経済によって生産を調整するにも、やはり根本的な処方箋として、生産を決定するものに対する道徳的抑制を促すことにしか、河上の思いは達しなかったといわなければならない。これが『貧乏物語』執筆当時の河上の限界であったといえるだろう。河上は個人の道徳的抑制を切々と訴えかける、筆力のある文章家ではあったが、しかしその主張は上記のような常識論的な理路をたどるほかなかったのである。

この河上の限界を打ち破ろうとするところに、高田の独創性はある。彼はある程度まで、河上と同じような奢侈品の廃止という常識論をとりながらも、しかし、それをより実効力のある理論に仕立てあげることに、よりいっそうの努力を傾けた。贅沢品を生産しないこと、また消費しないこと、利他的にふるまうこと、これらについての高田の思いは、河上の説くところとさしたる違いはない。しかしその先が決定的に異なっていた。高田による貧乏撲滅の理論の妙は、人口の問題、とりわけ出生率の多寡と絡ませるという迂回路をたどるところにある。

先に触れたように、貧困の原因を人口の過多に求めようとするものがある。いわゆる過剰人口論である。それは貧困層の出生力の高さを貧困の原因の一つとなし、出生率を下げることに解決策を見出そうとするものであった。大正から昭和にかけての日本の社会問題、すなわち貧困問題は、ある意味では、そうした人口抑制政策ないしは産児調節運動によって解決が可能である、という見通しが立てられていたといえるだろう。つまり膨張する都市人口を抑制することにより、貧困問題の解決を図ろうとしたのである。

しかしながら高田は、それと真っ向から対立する立場を採っていた。すなわち貧困層の出生力の高さを、むしろ逆手に取ったのである。いうなればそれは、増え続ける人口をそのまま放任することで、国民経済全体を、度を越した奢侈品の購入ができないくらいの「低い」生活水準に押さえ込もうとするものであった。ここに高田の慧眼があった。つまり贅沢ができないという意味では、なるほど生活水準は低下するだろう。それを貧乏と呼んでもよい。しかしそれは見せびらかしの消費ができないという意味での貧乏、すなわち相対的な貧乏なのである。

こうした発想はどのようにしてもたらされたのであろうか。それは高田の勢力への着眼によってであるといえよう。さきに触れたように、勢力の2つの機能のうち、顕示の方を最小限に押し留めることで、もう1つの機能であるところの勢力の獲得と所有の方に回す分の努力を増大させようとしたのである。高田は利己心を所与のものとした。力の欲望の一側面たる利己心ないし勢力を、いかにして善用、活用するのかを思案することによって、彼の人口放任論は唱えられたのである。生産については、いっさい手をつけずに、ただ人口を増えるにまかせることで、「国民皆貧」をめざすことを説いたのである。

そうした主張が旧来の人口政策と対立することはいうまでもない。しかし、その旧来の産児制限による貧乏退治の方策は、いかなる結果を生んだのであろうか。産児制限を行うことで、一時的に生活水準の向上にいたる中流下流の階級の成員は少なくないだろう。しかし、その階級は次なる上層の生活を羨むようになり、結局、新たな貧乏意識が生じる。貧乏意識がなくなるのは、こうした次第に増大する欲望に対する歯止めが、おそらく人間に備わっていないからであろう。産児制限という思想は、子供の養育やその他の福祉的な支出を減らし、自分一人の物質的な豊かな暮らしを満喫しようとする、都市生活者の心情と響きあうところがあった。しかしそれがもたらしたものは、顕示的消費を行う大衆の増大であった。このからくりを看破したことにより、高田は他の所説にはあまり類例の見られない、彼独自の貧乏論が展開できたのであった。

結 論

下層階級の窮状を考える際には、不可避免的にそれらをどうすべきなのかという当為の問題、倫理の問題に強く引き寄せられざるをえない。それにより河上は、少なくとも『貧乏物語』に限っていうと、倫理学に近い経済学を構想するという立場にいたった。本書執筆の後、河上は一種の宗教団体である「無我苑」に帰依し、それから社会主義へと傾倒することになる。それらはいずれも、彼の強い倫理的志向性の延長線上に位置づけられなければならない。

それに対して高田は、個々人の持つ倫理や情動を貧乏を始めとする様々な議論の前提において、むしろそれら倫理や情動といったものを学問の中に組み込むということを試みている。力の欲望を人間存在の前提におき、そこから人間の行動全般を読み解く鍵としたことが、そのことを端的に示している。高田のいう社会学および経済学における勢力説がその完成形態である。河上のように、経済学を倫理学化することではなく、高田のように人間の1つの側面である倫理というものを学問に盛り込むことこそが、社会運動の実践家ならぬ社会学者の使命であるのはいうまでもないだろう。

確かに人の志操を鼓舞してやまぬ河上の文章家としての風格には、おおいに心打たれるものがある。現にマルクス主義者であろうが、そうでなかろうが、彼の『貧乏物語』には実に多くの共鳴者があった。彼の文章のなかに、読者を

力づける何ものかがあったのは間違いない。しかし、『貧乏物語』段階における河上の理論家としての資質を考えた場合には、どうしても首肯しえないものが残ってしまう。『貧乏物語』の批判者の多くは、社会問題の解決のために、贅沢の抑制という道徳的処置をもってきていることで、河上を難じている。もちろん河上もそのことを認め、そうした批判に値する部分を削除して別著を作るといふこともしている⁹⁾。

それに対し高田の議論は、比較的に一貫した論理展開を行っていた。人間の情意的部分への考慮を怠らず、しかもその部分を統御するための理知的な理論を捜し求めたからであろう。それが彼の勢力説である。階級格差を解消するには、あるいは民族の衰亡をまぬかれるには、そしてまた平等な世界社会の建設には、「力の欲望」を人間の本来的な姿だとしてこれを所与とみなすべきだということ。そしてそれを前提としなければ、正当な社会科学は構想しえないことを高田は訴えつづけたのである。

今日、後進国への政府開発援助（ODA）などにおいて、単なるインフラ整備を主とする経済援助ではなく、人間が潜在能力を発揮できるようになるための、教育部門への投資が重視されるようになってきた。それは高田が目指した、勢力の積極的な側面を引き伸ばそうとする社会政策の発想と重なり合う部分が大きい。こうした新たな関心から高田の貧乏論は再び読み直されて良い時期に来ているといえるだろう。

-
- (1) 農村の貧困問題が衆目を集めだすのは、昭和に入ってからのものであろう。大正期の言論界では、まだそこまでの視野をもっていなかった。ただし統計的に見ると、大正9（1920）年頃の農村では、むしろ都市とは逆に階級の平等化が進展したとされている（林，2000：27頁）。
 - (2) 高田の貧乏論は、国家にあてはめられた時に耐乏論となり、より具体的な政策論として統制経済論として展開されることとなった（1944）。ここでいう耐乏論とは、喫緊の経済的課題に対し国家が集中的に対処するためならば、その他の分野での若干の窮乏や、遅れをいとわないという政策論である。
 - (3) 現在は「貧困線（Poverty Line）」と訳される。それ以上の収入を下げると、再生活を維持するのに支障をきたす最低水準の線をいう。
 - (4) これが「人類學的征服といふ觀念」、すなわち出生力というのは、文明国や上層階級や都市において低下する傾向にあるという觀念である（1942a：179頁）。それは、これまで弱い立場にあった非文明国や下層階級や農村における高い出生力が、今度は強い立場にあるものに取って代わるという着想である。これをきっかけに高田は、マルサスやマルクスの人口論に本格的に取り組むように

なる。

- (5) こうした構想のもとで徐々に形を成していった高田の貧乏論は、『階級考』（1923）、『階級及び第三史観』（1925）にまとめられている。
- (6) こうした高田の貧乏論には、多くの反論が寄せられたが、大別するとマルクス主義からのものと、社会学者のものがある。言論界がいまだマルクス主義の雰囲気につつまれていた、「國民皆貧論」を書いた昭和8（1933）年頃のことを、高田は次のように回想している。「これを書いた頃にはマルキシズムの思想が相當に残つてゐた。今日といへども潜在的にはいろいろの思想が流れてゐるようだが、當時はまだ文字や講演の表面にさへ見られた。否、新聞ことに雑誌はさういふ傾向のものでなくては讀まれないといふ空氣さへもあつた。此思潮が私の民族主義的な傾向を排斥せずに置くわけはない」（1942a: 186 頁）。当時の日本の社会主義者はまだ、虐げられた弱い民族同士の連帯という觀念に到達していなかったことをこれは意味する。
一方の社会学の立場からの批判には、どのようなものがあつたのだろうか。それは「私〔高田〕が社会学上の数多の著作に於て社会は利益社会的のものに向つて進むといひながら、日本民族の生活低下、進みては共同社会化を説くことは矛盾してゐないか」という疑問である（1942a: 187 頁～188 頁）。しかし、これは矛盾ではない。たとえば論文「民族と世界——民族の周流に関する法則」には、以下のことが述べられている。主たる傾向としては「利益社会化」という流れを持ちながらも、それは一直線に突き進むというのではなく、ある時は「共同社会化」の傾向をもち、「一種の循環的波浪的段階を辿りつゝ進む」と（1935: 228 頁～236 頁）。
- (7) 元来は『階級考』（1922）の階級の周流論（第6章）に収められていたものであるが、それがより洗練された形で『民族の問題』（1935）、それから『民族論』（1942）第9章の「民族周流論」を経て、最終的には『勢力論』（1940）で一応の結論が下されることとなる。
- (8) こうした意識論は、河上にも備わっている。「思ふに吾々人間にとつて大切なものは凡そ三ある。其一は肉体であり、其二是知能であり、其三是靈魂である。而して人間の理想的生活といへば、畢竟は等三のものをば健全に維持し發育させて行くことに外ならぬ。〔・・・〕便宜の爲め貧乏の標準を大に下げて、只肉体のこののみを眼中に置き、此肉体の自然的發育を維持するに足るだけの物を仮に吾々の生存に必要な物と看做し、それだけの物を持たぬ者を貧乏人として行く」（河上、1917: 11 頁）。高田のいう「合理性」は、河上のいう「知能」に、同じく「情意」は「肉体」に、そして「理知」は「靈魂」に、それぞれ相当するものであろう。
- (9) 河上はのちに『貧乏物語』を下編を廃棄し、上編と中編を『社会問題管見』の改訂版に盛り込んでいる。また、その『社会問題管見』さえ、改訂版では初版のものとは違っている。『貧乏物語』の下編を削り、同じ論調のスマート論やラスキン論を捨てている。その代わり、新たに「剰余価値の成立」や「労働運動の使命」などマルクス主義の色調の濃いものを、あえて加えている（大内、1971: 178 頁）。

文献

大内兵衛、1947、「解題」（河上肇『貧乏物語』、岩波文庫版、所収）。

河上肇、1917、『貧乏物語』（『河上肇全集』第9巻、岩波書店）。

——、1985、『自叙伝（下）』（『河上肇全集』続7、岩波書店）。

塩田庄兵衛編、1983、『河上肇『貧乏物語』の世界』法律文化社。

高田保馬、1911、「文明の迷妄——生産政策の否定」『藝文』第2巻第8号、明

治 44 年 (『社會學的研究』所収).

——, 1918, 『社會學的研究』寶文館.

——, 1923, 『階級考』聚英閣.

——, 1925, 『階級及び第三史觀』改造社.

——, 1927, 『人口と貧乏』日本評論社.

——, 1935, 「民族と世界」『民族の問題』日本評論社.

——, 1940, 『勢力論』日本評論社 (再版, 1959, 有斐閣, 及び 2003, ミネルヴァ書房).

——, 1942, 『民族論』岩波書店.

——, 1942a, 『民族耐乏』甲鳥書林.

——, 1944, 『統制經濟論』日本評論社.

——, 1950, 『マルクス貧困論考 (社會主義經濟学研究第 2 卷)』甲文社.

——, 1957, 「京大以前— 1 —」『エコノミスト』(毎日新聞社編) 35 卷 41 号.

——, 1957a, 「京大入学— 3 —」『エコノミスト』(毎日新聞社編) 35 卷 46 号.

パイル, ケネス・B (Pyle, Kenneth B), 2002, 「近代日本と社会問題の発生——外国における日本研究の最近の傾向」『法学新報』第 109 号 (1・2), 447 頁~458 頁.

林有一, 2000, 『「無産階級」の時代——近代日本の社会運動』青木書店.

古田光, 1965, 「マルクス主義と「求道」の精神」(末川博編, 『河上肇研究』筑摩書房所収).

細井和喜蔵, 1925, 『女工哀史』改造社 (再版, 岩波書店).

見田宗介, 1996, 『現代社会の理論』岩波書店.

横山源之助, 1899, 『日本之下層社会』岩波書店 (再版, 立花雄一編集, 2000, 『横山源之助全集 別巻一』社会思想社).